

森羅万象をまとう

—友禅 人間国宝 木村雨山・二塚長生の仕事—



木村雨山 《友禅訪問着 花(木蓮)》
京都国立近代美術館蔵



二塚長生 《友禅着物 生雲》

■ 新春優品選【前田育徳会・古美術・工芸・絵画・彫刻】

■ 書の魅力

- 文化財現地見学報告
- ミュージアムレポート
- 展覧会回顧（百工比照）
- 1月の行事予定
- アラカルト ただいま展示中

2018年

新年のご挨拶

石川県立美術館
館長 嶋崎 丞

木村雨山・二塚長生の仕事一

主催：石川県立美術館 特別協力：東京国立近代美術館

1月4日(木)～2月12日(月・休) 会期中無休

明けましておめでとうございます。

当館は、現在の新館を開館し本年度で三十五周年を迎えますが、旧館の開館から数えてみると何と五十九年にもなり、県立美術館としては古い歴史を有する館として位置付けられるようになりました。

旧館の開館以来、設立の主旨としてかたくなに守ってきたことは、郷土色豊かな美術館づくりを目指して運営してきたことです。

この石川県の地域は、近世の加賀藩時代以来藩主の前田家を中心に文化育成に力が注がれて、京都や江戸とはひと味違った独自の質の高い文化が展開しており、其の個性を美術館活動の中心に位置づけ、それを基礎にして現代の美術館活動を展開して参りました。

本年一月に「友禪」の無形文化財認定を早くに受けた木村雨山と、近年友禪として久方ぶりの認定を受けられた二塚長生氏の友禪二人展

平成二十九年に重要無形文化財「友禪」保持者・木村雨山は没後四十年を迎えました。その節目の年を記念し、加賀の地にゆかりのある友禪の人間国宝、木村雨山と二塚長生の代表作を一堂に公開し、その業績を紹介します。

木村は昭和三十年、重要無形文化財の制度が設立して、友禪の保持者として最初に認定された作家の一人であり、平成二十二年に認定された二塚が、展覧会の出品を始めるのは木村の晩年です。第一室では木村が初期帝展から日本伝統工芸展で活躍した時代の代表作、第二室を半分に分けて、木村の晩年と二塚の初期作品を併せて展示し、第三室では二塚が独自の作風を確立した平成初頭から、現在までの代表作をご覧いただきます。

1. 木村雨山

— その豊穡なる作品世界 —

木村が展覧会に出品した作品の中でも、記録上最も初期の



木村雨山 《友禪訪問着「露地の石敷き」》
東京国立近代美術館蔵

を開催します。

春の企画展は、前田家が収集し育成した加賀藩ゆかりの優品を中心に、名宝を一堂に集めた大回顧展を開催します。金沢美術倶楽部のご協力を得て、隠れた名宝が久方ぶりに展示される予定でご期待いただければ幸いです。

秋は、日本の近代工芸の特質である漆工芸名作展を開催します。石川県の漆工芸の技術や質の高さを、全国の漆工芸の中で位置づけて鑑賞していただくまたとない機会と思っています。

このように本年も古美術から近現代の作品に至るまで、地域ゆかりにこだわった名宝名作を数多く展示する予定で、十分ご堪能いただけるのではないかと考えています。

本年もどうぞよろしくお願い致します。

作品と考えられる商工省工芸展出品作、初期の帝展に出品された平面作品から、新文展、日展、日本伝統工芸展に出品された代表作など、作家としての確立から重要無形文化財保持者認定を経て、新鮮な作品を生み出した、豊かな作品世界を紹介します。

2. 二塚長生 — 名工から表現者へ —

第二室後半には、独自の作風を模索する時代の、みずみずしい作品群を展示し、吟味された少ない色目に、糸目糊の細く躍動的な線による描写、防染糊の可能性を追求した作風へと移行していく作品群をご覧いただきます。第三室では、二塚の作品を年代順でなく、表現されたテーマに分けて展示します。

絵画的な描写を友禪に応用した両者の作品は、色のにじみを防ぐための細く白い糸目糊の線が、染められた色と同様に模様を作り上げ



木村雨山 《友禪訪問着「花」》
シルク博物館蔵

1F 企画展示室

しんらばんしょう

森羅万象をまとう 一友禅 人間国宝

ています。展示室ではその細やかな描写を見ていただくとともに、計算された巧みな構図による、一幅の絵画のような「まとう芸術品」をお楽しみください。



二塚長生
《友禅着物「白濁」》

◆関連行事

◇文化庁工芸技術記録映画上映会&トークショー

「友禅・二塚長生のわざ」

ゲスト・二塚長生氏・井上実氏(桜映画社・同映画監督)

日時・1月7日(日)午後1時30分

会場・石川県立美術館ホール、聴講無料

◇映像ギャラリー

「シリーズ北陸の工芸作家 石川の匠たち 夏去る 友禅・人間国宝

二塚長生」(60分)

日時・1月14日(日)午後1時30分

会場・石川県立美術館ホール、聴講無料

◇展示作品解説

(スライド上映と出品作品解説)

講師・二塚長生氏

日時・1月21日(日)

午後1時30分

会場・石川県立美術館講義室、

聴講無料



二塚長生 《友禅訪問着「音しぶく」》
式年遷宮記念神宮美術館蔵

◇土曜講座

午後1時30分

1月6日(土)「友禅 歴史と現在」寺川和子

2月10日(土)「木村雨山の図案とスケッチ」寺川和子

会場・石川県立美術館講義室、聴講無料

◇ギャラリートーク(毎週日曜日)

担当学芸員が展覧会の見どころや出品作について解説を行います。

午前11時、要観覧料・予約不要

◆観覧料 ※()内は20人以上の団体

一般 1,000円 (800円)

大学生 800円 (500円)

高校生以下無料

※コレクション展示もご覧になれます。

眼の芸員学

文化庁は毎年、重要無形文化財保持者の技術記録映画を制作しており、制作が決まった保持者の方々は、そのために一点の作品を作るようになります。映像記録として制作風景や日頃使っている道具、材料などを長時間に渡ってつぶさに撮影し、作品も記録の成果として保管されるため、通常の作品制作以上の緊張を強いられます。

一月七日に上映される映画は、昨年制作された二塚長生の技術記録映画です。今回は映画の監督と作者ご本人をゲストに迎え、制作時の苦労やエピソードを語っていただきます。残念ながら制作された作品は現在、日本伝統工芸展で全国を巡回していますので、展示室では図案とパネルでご紹介しています。展覧会と併せてぜひご参加ください。

新春優品選

会期：12月23日(土・祝)～2月5日(日)

新春優品選

休館日：12月29日～1月3日

『新春優品選』として、前田家が所蔵する能面と能装束を紹介します。

「加賀宝生」と称されるように、金沢において宝生流の能が盛んな理由は、加賀藩五代藩主綱紀の宝生流採用に始まります。貞享三年(一六八六)、五代將軍綱吉の命により綱紀は江戸城にて初めて〈桜川〉を舞い、元禄五年(一六九二)には九世宝生大夫友春二男の吉之助を召し抱えました。吉之助を初世とする宝生嘉内家は、後の大正時代に十七世九郎重英を生んだこともあり、「加賀宝生」の名は現在に至るまで使われ続けます。

綱紀以降の藩主も能を好み、十二代斉広の時代である文化八年(一八一二)には、藩政期最大の規式能がのべ六日間行われます。焼失した二の丸新築祝いと家督相続、藩主人国を祝うため、総勢二百五十名の能役者が

第二展示室も『新春優品選』として、能面と能装束を中心に紹介します。

江戸時代後期、十一代將軍家斉が宝生流を鼻祖としたことから、宝生流は綱吉時代と並ぶ隆盛期を迎えます。その象徴が江戸時代最後の勸進能である「弘化勸進能」(嘉永元年)でした。

当時の大夫は十五世友于。江戸筋違橋御門外で行われたのべ十五日間の勸進能には、五万七千人以上もの見物客が集まりました。人気の高さを示すように、勸進能の様子は絵巻や摺物として出回ります。石川県立歴史博物館所蔵の《宝生友于勸進能興行絵巻》(二巻)はそのひとつで、舞台だけでなく、棧敷や楽屋の賑わう様子を伝えます。

家斉の二十一女偕(溶姫)を室とした前田齊泰は、江

出演しました。

それに合わせるかのように、能装束は文化年間より盛んに仕立てられます。今日、加賀藩前田家旧蔵として伝わる能装束のほとんどが、斉広とその子十三代齊泰の時代に仕立てられたものです。現在、前田育徳会には十五点を残すのみですが、かつては四百点以上もあったと推測されます。

後に、それら能装束の模様の模写を試みたのが、狩野芳崖です。芳崖は明治二十年(一八八七)の夏、四人の弟子を連れて本郷邸を訪れますが「以後三カ年悶するとも尚ほ写し終わらぬ」として、ひと夏で断念します。今回展示する《能装束地紋図》(全九巻)は、この際模写したものと関係が深いと考えられます。能面九点と能装束六点とあわせてご覧ください。

戸滞在時にしばしば友于より能の指南を受けます。特に、嘉永四年(一八五二)は共に演じ、許状をもらい、新たな能の創作にも着手するのです。

翌年、能『来殿』はできあがります。前田家が家祖として崇める菅原道真の没後九百五十年にあわせてつくられた『来殿』は、道真が鳴雷として鬼神姿で登場する『雷電』を改め、「中将」の面をつけた高貴な貴公子姿の「大富天神」としたのです。

道真の命日にあたる二月二十五日、『来殿』は披露されました。『来殿』は今日も宝生流の現行曲ですが、当時の詞章は現在と異なります。前田土佐守家資料館所蔵の《来殿》は、創作当時の詞章で書かれた貴重な本です。本特集では、能面六点と能装束五点だけでなく、こうした能楽資料もあわせて紹介します。



《鶴茶地型紙花紋散縫箔》

《能装束地紋図》(部分)

書の魅力/新春優品選

会期：12月23日(土・祝)～2月5日(日)

【書の魅力】当館は近現代の書作品を、現在、三十五作家五十四点所蔵しています。伝統的な書法に基づく作品から、前衛書と呼ばれる文字の約束事から離れた作品まで、分野は多岐にわたります。旧館時代の昭和三十年代半ばに当館で「現代日本書道の名家」展を開催したことがきっかけで当館作品となった作品も数多くあります。それらは書道史上の古典を尊重している昭和を中心に活躍した県内外の書家たちの作品です。その他、墨跡に近いものや、書を専門にした人ではないものの、教養として書をたしなむ文人・画人の書作品も所蔵しています。

今回は、所蔵作品をこのような観点に基づいて展示し、同じ種類の書跡を相互に見比べ、それぞれの作家の表現や感じ方の違いなどを感じ取っていただきたいと思えます。

【新春優品選】新たな年を迎えるにあたり、洋画部門では祭礼や遊びを描いた作品をご覧ください。今から三十年前国鉄時代の金沢駅コンコースを飾っていた二枚の大作、宮本三郎の《加賀獅子舞》と高光一也の《森の精》、対照的な作品のように見えて、描かれた人物や動物など、意外と共通点のある構成となっています。そのほか福笑いを絵画化した作品などをお楽しみ下さい。

彫刻分野では館蔵品を中心に具象の作品をお楽しみください。展示では、人体・首・木彫作品による構成で、テーマと素材との融合を示す個性溢れる作品をご覧ください。また来年の干支である木彫の犬作品も展示いたします。

日本画からは横山大観《長江の朝》など、正月を飾る清々しい作品をご覧ください。



得能節朗 《歌姫》



豊道春海
《林希逸七言对句 (静と和)》

新春優品選

休館日：12月29日～1月3日

今回の展示では、一階展示室にて開催中の企画展『森羅万象をまとう』にあわせ、そちらで展示しきれなかった木村雨山作品や雨山の弟子である水野博、そして同時代に活躍した談議所栄二や梶山伸の作品などを展示します。なかでも木村雨山《友禅黒地吉祥文振袖》と《友禅赤地吉祥文振袖》は、それぞれ黒と赤を背景に、松や色とりどりの花々、瑞鳥で埋め尽くすように染め抜かれ、新春にふさわしい豪華絢爛な作品です。

その他の分野の展示でも、雨山と同時期に活躍した作家たちの作品をご覧ください。昭和三十年に最初の重要無形文化財の認定(第一次・二

月、第二次・五月)が行われ、雨山は重要無形文化財「友禅」保持者として認定されますが、期を同じくして認定された富本憲吉(色絵磁器)、石黒宗磨(鉄釉陶器)、松田権六(蒔絵)、前大峰(沈金)、上野為二(友禅)、初代魚住為楽(銅鑼)、堀柳女(衣裳人形)の作品を同時に展示します。

昭和二十九年の文化財保護法改正により、かたちのない「わざ」そのものの価値が、芸術的にも評価されるようになりました。第一回の認定に選ばれた彼らは、最初の人間国宝たちともいわれます。今につながる人間国宝たちの、ひとつの原点である彼らのわざを、ぜひ堪能していただきたいと思えます。



堀 柳女 《木彫衣裳人形 [渦紋]》

第48回 文化財現地見学報告

「兵庫の文化を味わう 一快慶仏からハイカラ神戸まで」

平成29年10月21日(土)～22日(日)実施

第四十八回目となる今回は「兵庫の文化を味わう一快慶仏からハイカラ神戸まで」と題して、兵庫県神戸市、小野市、篠山市をめぐるしました。

まず白鶴美術館にて、中国陶磁器を中心とした展示を見学し、図様に込められた吉祥の意味などをお伺いしました。次の香雪美術館では、利休と剣仲にゆかりの茶道具を楽しみました。籠花入のエピソードなど、興味深いお話を聞くことができました。両館はそれぞれ白鶴酒造七代・嘉納治兵衛、朝日新聞社創業者・村山龍平の個人コレクションに基づいており、京阪神モダン文化の精華といえるでしょう。

兵庫県立美術館では大エルミタージュ展を見学しました。エカテリーナ二世の珠玉のコレクションによって、西欧絵画のエッセンスを感じていただけたのではないかと思います。

二日目はまず小野市の浄土寺へ。ボランティアガイドの方々のお話を聞きながら、国宝・浄土堂、快慶作の国宝・阿弥陀三尊像を拝観しました。鎌倉時代の創建当初から変わらないお姿に、荘厳な信仰の世界を垣間見ました。

続いて篠山市へ移動しました。篠山城大書院では室内を巡りながらご解説をいただき、篠山藩五万石の風情を感じることができました。昼食を挟んで丹波古陶館・篠山能楽資料館へ。いずれも中西館長のご解説のもと、日本六古窯の一つである丹波焼の歴史や、この地で受け継がれてきた丹波猿樂の伝統にふれました。

台風がせまる大変な天候のなか、大きなトラブルもなく無事に金沢まで帰り着けたのも、皆さまのご協力のおかげです。この場をお借りして、改めて御礼申し上げます。



浄土寺にて

ミュージアムレポート 「0才からのファミリー鑑賞会」「学校出前講座」

十一月十一・十二日に、今年も乳幼児とそのご家族に展覧会を楽しんでいただく「0才からのファミリー鑑賞会」を開催いたしました。今回は三ヶ月の赤ちゃんから六才までの子どもたちでした。おじいちゃん、おばあちゃんも来てくださったご家族、お子さん三人とご両親の五人で参加くださったご家族など、たくさんの方に参加頂きました。赤ちゃんも工芸作品をみるというテーマで、特集展示『棚の美』の伝統的な漆芸作品と、『東京国立近代美術館工芸館名品展』の色や質感、形の選択肢が幅広い陶磁作品の鑑賞を行いました。中でも黒くピカピカとつやがある漆芸作品は、赤ちゃんのお気に入りジャンルです。じーっとみたり、足や手をバタバタさせたり、また、指さしたりとその年齢らしい、また、そのお子さんそれぞれの「好き」の身体表現で教えてくれました。今年も赤ちゃんも美術作品を鑑賞していることを実感した講座でした。



今年の学校出前講座は十一月で終了し、今まで開催が少なかった内灘町やかほく市を含め、県下十校で開講しました。通常は高学年で授業させていただくことが多い本講座ですが、今年度は小規模校での開催も複数あり、低学年でも授業を行いました。前述の「0才からのファミリー鑑賞会」と同様、どんな年齢の子どもたちもお気に入り作品を見つけ、作品鑑賞の楽しみを味わっていただくと感じています。

前田育徳会尊經閣文庫分館 特別陳列 「百工比照」

今回の特別陳列は、二年前の特別展「加賀前田家 百万石の名宝」以来の「百工比照」の体系的な展示でした。展示総数は前回に及びませんが、二期にわたり収納箱を除くすべての展示を替えましたので、特に第一号箱や第二号箱の内容は前回よりも詳しくお伝えすることができました。

さらに本年度は、特別展「よみがえった文化財」で加賀藩五代藩主・前田綱紀が書物の収集と同じ思想に立脚して、保存・修復や複製の制作をはじめとする文化財の保護に先駆的に取り組んだ事実を明らかにしました。こうして「知の巨人」としての綱紀の新たな側面に光を当てたことを受けて、綱紀が編集した「百工比照」が内包している深遠な世界についても、「美術館だより」での紹介をとおして展望することができました。

前田綱紀の根本姿勢は万物を貫く根拠としての理を究め、体現してゆくことだったと考えられます。今回の展示によって「百工比照」はその姿勢が、自然物を加工し、装飾を加えるという人間の創造的な営みに向けられた軌跡だったと確信しました。「百工比照」は江戸時代十七世紀から十八世紀の工芸の材質や技法、さらにはデザインの「百科事典」としてこれからも広く注目を集めていくことで

しょう。しかし、今回の展示では詳細を明らかにすることができませんでしたが、前田綱紀の高邁な精神なくしては「百工比照」は誕生しなかつたことを忘れることはできません。展示の方法も含めて、将来の課題も見えてきた特別陳列でした。

ミュージアムショップ通信

ミュージアムショップからは、本年度開催した展覧会の図録をご紹介します。「よみがえった文化財展」の図録では、石川県文化財保存修復工房が修復した文化財のビフォー&アフターを、写真で対照的にご覧になれます。さらに、作品解説や修理報告書などの資料も豊富です。定価二〇〇〇円。

「燦めきの日本画」展の図録は印刷精度にこだわり、石崎光瑤作品をはじめ京都画壇が誇る名品の数々を美しく再現した一冊です。定価一八〇〇円。

新春展「森羅万象をまとう」でも図録を制作します(定価未定)。乞うご期待。

1月の行事予定

■文化庁技術記録映画上映会&トークショー	午後1時30分	美術館ホール、聴講無料
7日(日)	「友禅・二塚長生のわざ」 ゲスト：二塚長生氏・井上実氏(桜映画社・同映画監督)	
■映像ギャラリー	午後1時30分	美術館ホール、聴講無料
14日(日)	「シリーズ北陸の工芸作家 石川の匠たち」 夏去る 友禅・人間国宝 二塚長生(60分)	
■企画展・作品解説	午後1時30分	美術館講義室、聴講無料
21日(日)	スライド上映と出品作品解説	講師 二塚長生氏
■土曜講座	午後1時30分	美術館講義室、聴講無料
6日(土)	「友禅 歴史と現在」	寺川 和子
13日(土)	「作品鑑賞の楽しみ」	深山 千尋
20日(土)	「絵画の見方―材質と形態―」	中澤菜見子
27日(土)	「素材と彫刻・彫刻と色彩」	北澤 寛
■企画展ギャラリートーク	午前11時	、要観覧料・予約不要
会期中の 毎日曜日	担当学芸員が展覧会の見どころや出品作について解説を行います。	

※土曜講座のスケジュールが当初と一部変更になっています。ご了承ください。

《砂張三象花入》さほりさんぞうはないれ

口径10.9cm×底径9.2cm×高27.0 昭和23年(1948)

初代 魚住為楽 しょだい・うおすみ・いらく

明治19年～昭和39年(1886-1964)



銅に錫や銀などを混合した合金である砂張を用いた花入れで、脚部を三匹の象の頭部によってかたどっています。砂張は、収縮率が高いため非常に扱いの難しい金属ですが、本作品のなめらかな表面と形態からは、その素材を自在に取り扱う初代為楽の技術の高さがよくわかります。

本作品にはいくつかの姉妹作が知られています。そのうちのひとつである《砂張三象花生》(小松市立本陣記念美術館蔵)に附属する添書には、これら三象花入のルーツが記されています。それによると、昭和十一年十一月に初代為楽が益田鈍翁の別邸・掃雲台にて織田有楽斎所持と伝わる三象花入を熟覧します。摸作が命じられますが、銅の

統制や法隆寺夢殿修理への参加などにより完成が遅れるうちに、鈍翁が逝去してしまっています。十四年、鈍翁一周忌の法要を前についに完成し、霊前に奉獻されました。この添書は昭和十九年春の款記を伴い、また花入が五個作られたことなども書かれています。

当館の作品は昭和二十三年に再制作されたもので、象の頭の位置が高く、鼻がゆるやかなカーブを描いて長く伸び、そのまま脚部をなす点など、初代為楽の創意がみられます。本陣記念美術館のものが重厚で荘厳な趣きを持つのに対し、本作品はより優美で繊細な印象を感じさせます。

次回の展覧会

平成30年2月9日(金)
～3月21日(水)

	前田育徳会尊経閣文庫分館	第2展示室
	加賀藩の美術工芸	古九谷・再興九谷名品選
第3展示室	第4・6展示室	第5展示室
写真と幻想	優品選 [絵画・彫刻]	明治の工芸

ご利用案内

コレクション展観覧料

一般 360円(290円)
大学生 290円(230円)
高校生以下 無料
※()内は団体料金
1月のコレクション展示室無料の日はありません。

今月の開館時間

午前9:30～午後6:00

カフェ営業時間

午前10:00～午後7:00 年中無休

1月の休館日は
1日(月・祝)～3日(水)

「石川県立美術館だより」に広告を掲載しませんか?

石川県立美術館友の会会員、石川県立美術館協力者、
県内各行政機関及び文化施設、全国の美術館・博物館へ

郵送配布!! 3,000部発行

ターゲットを狙った
知名度向上県立美術館発行の
信頼度の高い広報媒体

お問い合わせ ☎ 092-716-1401

株式会社ホープ 福岡県福岡市中央区薬院1-14-5MG薬院ビル7F
東京証券取引所マザーズ上場 福岡証券取引所Q-Board上場 財務確保 検索石川県立美術館だより
第411号(毎月発行)
2018年1月1日発行
〒920-0963
金沢市出羽町2番1号
Tel: 076(231)7580
Fax: 076(224)9550
URL: <http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/>